

国

語

(60分)

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、
左記の注意事項をよく読むこと。

注意事項

- 1、問題冊子は、22ページまであります。
- 2、解答用紙は問題冊子の中央にはさんでいます。解答はすべて、解答用紙に書き込みなさい。
- 3、始め、の合図でページ数を確認し、受験番号・名前を書きなさい。
- 4、問題の内容についての質問には、いっさい応じません。印刷のはっきりしないところがあれば、静かに手をあげなさい。
- 5、時間を知りたいときも、静かに手をあげなさい。
- 6、具合が悪くなったり、トイレに行きたいときは、手をあげて監督の先生の指示に従って行動しなさい。
- 7、問題冊子は、各自持ち帰ってよろしい。

一 次の文章は「なぜカブトムシは商品として売られるようになったのか」という問いに続くものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。(なお字数制限のある問いは句読点や記号も一字に含みます)

われわれの歴史は、自然を社会化してきた歴史ともいえる。少し表現をかえるならば、これまでにわれわれは生活のなかに自然を取り込んできた。自然を社会化することは大きく二つに分けることができる。

第一に、労働による自然の社会化である。われわれは動物を狩り、魚を捕り、木の実を拾う営み、すなわち*漁労も含めて狩猟採集を行ってきた。そして、種を植え、あるいは苗を植え、作物を収穫する農耕、そして家畜を飼育する牧畜も行ってきた。この農耕牧畜において、われわれは労働を通して自然を人間の社会に取り込みはじめた。すなわち、労働による自然の社会化をはじめたのである。

その一方で、われわれの自然の見方を規定する、文化による自然の社会化を見逃すわけにはいかない。いにしえからわれわれは星空を眺めてきた。そして、星と星をつなげ、星のまとまりを星座と呼び、その星のまとまりから神話の世界などを想像していた。不思議なもので、われわれは一度その星のまとまりを秩序ある星座と捉え、もはやばらばらな星の無秩序なまとまりとは見えなくなる。冬空に三つの一直線に並んだ星を見るとオリオン座だと即座に反応する人も少なくないのではないか。このようにわれわれはあるフィルターを通して、自然を眺めている。これをさしあたり文化と呼ぼう。

文化を通して自然を見ることをもう少しみておこう。一方で、ある文化は牛を見て家畜だと捉えるが、他方で、ある文化では牛は聖獣であると捉える。文化によって自然がどのように捉えられるかが異なる。

A、それぞれの文化によって自然をどう捉えるか、もつといえば、文化のなかで自然がどう位置づくかが違うのである。それもそのはずで、それぞれの文化は、その土地の風土と切り離すことができない。さまざまな風土のなかで生活していくことを通じて文化が形成された。

B、日本であれば日本の風土における四季折々の自然の変化を踏まえて*歳時記が育まれていった。C、さまざまな自然条件を取り込むことで文化が育まれていった。これが、第二の文化による自然の社会化である。

さて、ここまで論じてきたように、自然の社会化は労働による自然の社会化と文化による自然の社会化と大きく二つに分け

ることができる。そして、この両者はそれぞれ別々の側面を備えながらも深い関係がある。たとえば、歳時記は〈農〉なしに生まれなかつただろうし、歳時記なしには〈農〉は不可能だつただろう。カブトムシの話に戻れば、カブトムシを商品として捉えるようになったことは、自然の社会化の視点が欠かせない。文化による自然の社会化から言えば、われわれはカブトムシをいつしか里の昆虫ではなく、売り買いする商品として捉えるようになった。そして、労働による自然の社会化から考えれば、われわれが里の生活を手放し、都市の労働を通して自然を社会化していたことの結果であると考えることができよう。では、われわれが里の生活を手放した結果、どのような労働を通じて自然を社会化するようになり、どのような文化によって自然を社会化しているのだろうか。

少々単純化しすぎるかもしれないが、大きく人類史を捉えたと以下のようになる。^③

そもそもは自然のなかにわれわれがあつたとも言える。狩猟採集においては自然の秩序のなかにわれわれが従つていた。その後、農耕牧畜にうつるなかで、われわれが徐々に自然と距離を取り始める。本章で里の生活という場合、この農耕牧畜の生活を指している。そして*産業革命後の化石燃料に依存した都市の生活において人間と自然の関係は一変する。われわれの自由な思考や知的な想像力と裏腹ではあるが、われわれが自然を支配する構図となると同時にグローバルに社会環境が拡大することと相まつて人間にとつての環境としての自然が大きく拡大する。身近な自然環境だけでなく、地球の反対側の森や川まで自然環境になる。われわれは普通の生活をしながら、地球の反対側の自然を破壊している。日本で使われている木材の多くは海を渡つてきていることを忘れてはならない。へ a へ

ここでいう都市の生活というのは、都市と農村に区別する意味での都市の生活ではなく、商品に囲まれた生活を都市の生活と呼ぶ。われわれの生活を眺めてみると、*このブックレットも商品であり、道路として舗装されたアスファルトも商品であつたし、洋服も商品であり、食べものもそのほとんどがスーパーやコンビニで買った商品である。そして、なにより労働力「商品」としてわれわれ自身が商品となる。商品とはそもそもわれわれにとつては、よそよそしいものである。ここでもカブトムシを例に取るならば、自分で取ってきたカブトムシ、あるいは友達が取ってくれたカブトムシではなく、商品としてのカブトムシは最初から商品として売るために大量に効率よく作られた、生産者の側にとつても、購入する消費者の側にとつてもよ

そよそしいカブトムシである。よそそしいものである商品に囲まれてわれわれは生き、われわれ自身が商品になりながら商品を作り出す労働をしている。へ b へ

⑤では都市の生活にうつるまえの生活はどのようなものだったのだろうか。それが里の生活である。里の生活の最大の特徴は、人間と自然の物質循環を取り結ぶ〈農〉が営まれている点である。ここでは、産業としての農業と区別するために、〈農〉という言葉を使いたい。里の生活における〈農〉に欠かせないのが里山である。しばしば里の生活における自然環境は大きく三つに分けられて理解される。第一にわれわれが足を踏み入れることのない【 i 」、第二に【 ii 」、第三に農地と生活空間である【 iii 』である。ここでは、奥山と【 iv 』との間にある【 v 』に着目したい。

カブトムシは里山の昆虫である。カブトムシがいるということは、里山があるということであり、里山があるということは〈農〉が営まれているということでもある。〈農〉を営むためには、里山を適切に管理しなければならぬ。その里山は、里に住むみんなの土地という意味で*コモンズとも呼ばれる。コモンズは、里山、里海としてわれわれの生活に欠かせなかった。コモンズとしての里山は*薪炭の供給地であり、農地を豊かにする落ち葉などの供給地でもあり、日本の山村の*代名詞でもある。里の生活には里山が欠かせなかった。里山がはげ山になってしまわないように、過剰に薪をとらないなど里山を管理するルールが定められていた。コモンズとしての里山を管理していた結果として、里山の昆虫が里に住まう人間とともに生きていたのである。たぐさんの葉を落とし、農地を豊かにする落葉広葉樹と切っても切れないカブトムシがいなくなったことは、コモンズとしての里山がなくなったことを象徴している。へ c へ

里、里山、奥山はひとつの物質循環の*単位であった。たとえば水をとってみても、奥山から里山へ、里山から里へ流れていき、また雨が降ることによって奥山に水が戻り、貯えられる。他方で、人間もひとつの物質循環の単位である。人間の身体も一方でかたちとしての同一性を保ちながら、他方でなかみである物質はある一定期間で入れ替わっている。すなわち、人間の身体も物質循環のただなかにある。その人間と自然の物質循環を取り結んでいたのが〈農〉であり、〈農〉を営むためには、里、里山、奥山という物質循環の単位が里の生活においては欠かせなかった。

しかし、都市の生活は、その持続可能な物質循環を断ち切った。森林を非持続的に利用しつくし、化石燃料も利用し、化学

物質によって汚染^{おせん}しつくす勢いである。〈農〉^⑥にとつてかわつた農業も工業生産物である農薬や肥料を大量に投入することになりたつている。工場で作られた*窒素^{ちつそ}化合物が大量に農地に投入されているが、その窒素がもとの場所に戻つて循環するとはない。物質循環の仕組みがないところでは、里、里山、奥山という物質循環の単位は人間にとつて必要なくなり、里山はコモンズとして管理されず荒廃^{こうはい}していく。その結果が、野生動物の里への侵入^{しんにゆう}であり、カブトムシが商品として買わなければならぬ代物^{しろもの}になつてしまふことである。へ d へ

カブトムシが商品として売られていることは、人間と自然の物質循環を媒介^{ばいかい}する里の労働から、商品を生み出す都市の労働へと変化したことを示している。里の労働を通じて社会化された自然から、都市の労働を通じて社会化された自然に変容していき、その結果、自然を商品として捉えることとなる。その都市の労働による自然の社会化は、自然を人工的に改変し、人工的なものに価値を見出す都市の文化を支えうる、文化による自然の社会化にも深く影響^{えいきやう}を与えることになる。へ e へ

⑦ 最初の問いに戻ろう。なぜカブトムシは商品として売られるようになったのか。それは直接的には、カブトムシがすまうコモンズとしての里山を破壊していったこと、そしてその背景には、自然を商品として見るようになったことがある。そのように考えれば、カブトムシが商品として売られていることは、人間と自然の持続可能な物質循環に亀裂^{きれつ}が入っていることの特徴であるといえる。カブトムシが商品として扱^{あつか}われること、言い換えれば自然が商品として捉えられることは、われわれの生活や文化のなかに深く、そして広く浸透^{しんとう}している。われわれは人間や自然を商品として扱うことにしばしば疑問を持たなくなつていることは自然を商品として扱うことが深く浸透していることの証^{しやうこ}拠であるし、われわれが日本にいながら世界各国のカブトムシに出会うことができることも商品交換^{こうかん}がグローバルな規模で広く行われていることの象徴でもあるのだ。

大事なことなので強調しておきたいが、人間と自然の物質循環に入った亀裂を修復することは、そのまま過去の生活や文化を取り戻すことを意味しない。言い換えれば、「古き良き」伝統を回復することとイコールではない。都市の生活や文化を踏まえた新しい物質循環の単位を考える必要がある。本論の延長として新しい物質循環の単位を考えるポイントを簡単に述べておくならば、それは人間と自然の脱商品化^{だつ}である。商品として扱うことが根本的な原因であれば、商品として扱うことをやめるか、制限すること、すなわち脱商品化を目指すのは当然のことだろう。したがって、人間と自然を商品として扱わない、人

間と自然を商品とはみない見方を基礎とした生活や文化の実践を積み上げていくことが肝要なのである。そしてその先に新しい物質循環の単位が構想しうるのではないだろうか。

(尾関周二、環境思想・教育研究会『環境を守る』とはどういうことか——環境思想入門』第四章大倉茂『カブトムシから考える里山と物質循環——「自然の社会化」と「コモンズ」による。なお、設問の都合上、小見出しは省略した。)

(注)

- * 漁労……魚や貝など、海や川の生物をつかまえること。
- * 歳時記……季節の移り変わりや行事を書いた本。
- * 産業革命……一八〇〇年ごろに西洋で起きた技術・産業の飛躍的な変革。
- * このブックレット……出典である書物を指す。ブックレットは小型の本のこと。
- * コモンズ……ここでは、共同で所有・管理する土地のこと。
- * 薪炭……たぎぎと炭。
- * 代名詞……あるものの性質・状態などを代表的に示す言葉。
- * 単位……あるものごとを構成するひとまとまり。
- * 窒素化合物……ここでは、窒素を主成分とする肥料のこと。

問1 傍線部①「労働による自然の社会化」、②「文化による自然の社会化」の具体例として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 建築用の木材を安定して得るために、山に植林する。
- イ 四季を楽しむために、庭の花だんに植物の種を植える。
- ウ 勤め先の図書館へ行くために、海辺の道を歩く。
- エ 日本では、地殻変動が活発なため地震が多い。
- オ 日本では、山は神が宿る神聖な場所とされる。
- カ 日本では、集団の調和を重んじる傾向がある。

問2 空欄部 A C に当てはまる語句として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回以上選んではいけません。

ア しかし イ つまり ウ では エ したがって オ たとえば

問3 傍線部③「大きく人類史を捉えると以下のようになる」とありますが、人類の生活はどのように変化しましたか。筆者の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人類は狩猟採集による里の生活を営んでいたが、人類の自由な思考や知的な想像力を生かし、産業革命後は地球のあらゆる場所で都市の生活を送るようになった。

イ 人類は身近な自然の中で狩猟採集や農耕牧畜を行っていたが、里の生活では自然との距離ができ、産業革命後は最終的に都市部で生活が完結するようになった。

ウ 人類は農薬や肥料を使用せず、自然の力を活用して農耕牧畜を行っていたが、産業革命後は技術の発展によりどんな自然環境でも農耕牧畜ができるようになった。

エ 人類は自然のルールにのっとり狩猟採集を行っていたが、農耕牧畜を営む生活を経て、産業革命後は地球規模で自然を思い通りに利用しようとするようになった。

オ 人類は狩猟採集から農耕牧畜へとうつる中で、自然に支配される側から支配する側になり、産業革命後は地球の反対側の自然環境も統制できるようになった。

問4 傍線部④「よそよそしいカブトムシ」とは、どのようなカブトムシですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 多くの人に販売^{はんばい}するために作られた、個人の思いに関わりのないカブトムシ。

イ 他の人が自然の中で捕^{つか}まえてきた、自分の生活と接点を持たないカブトムシ。

ウ 都市の生活では目にしない、消費者にとってなじみのない種類のカブトムシ。

エ より優れた^{すぐ}個体を作るため、生産者が苦心^{くしん}して一匹^{いっぴき}ずつ飼育^{かいよく}したカブトムシ。

オ 都市の生活でも育つように、人工的に作ったえさを与えて育ったカブトムシ。

問5 傍線部⑤「人間と自然の物質循環を取り結ぶ〈農〉」とありますが、〈農〉が取り結ぶ「人間と自然の物質循環」とはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間が里山の環境に^{かんよ}関与しないことで、里山の野生動物の命を守ることになり、またその野生動物をつかまえて食べることで人間も生命活動を行うというもの。

イ 人間が里山の自然を積極的に保護することで、自然からの^{おんけい}恩恵を受ける里の生活が実現するとともに、そこで生活する人間の心にも豊かさをもたらすというもの。

ウ 人間が里山を管理して農業を持続可能なものとする^{こと}で、農作物が永続的に都市へ供給され、農村だけでなく都市の人間の生活も持続可能になるというもの。

エ 人間が里山の土^ど壤^{じょう}を豊かに^{こと}で、そこで収穫される農作物の質が上がり、人間がとりこむ栄養価も向上して健康的な生活を可能にするというもの。

オ 人間が里山を適切に管理し農地が豊かになる^{こと}で、そこで収穫した作物を食べる人間の内部で新しい^{さいいぼう}細胞が古い細胞にとってかわり、命が維持^{いじ}されるというもの。

問6 本文中の【 i 】 【 v 】に当てはまる語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を何度使ってもかまいません。

ア 里 イ 里山 ウ 奥山

問7 傍線部⑥「〈農〉」にとってかわった農業」の目的はどうすることですか。二十字以内で説明しなさい。

問8 本文中のへ a へ e のいずれかに次の一文が入ります。どこに入れるのが最も適当か、記号で答えなさい。

したがって、いわゆる「いなか」に住んでいても、現代社会における日本に住まうひとびとのほとんどが都市の生活を営んでいるといつてよい。

問9 傍線部⑦「なぜカブトムシは商品として売られるようになったのか」とありますが、その答えを筆者はどのように述べていますか。「へ」から。「へ」に続くように、五十字以内で答えなさい。

問10 筆者の主張として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア その土地の風土の中で生活することを通して形づくられる文化を創造するべきだ。
- イ 都市の労働により物だけでなく人間自身も労働力という商品とする必要がある。
- ウ 里山の荒廃こうはいをもたらす窒素化合物の農地への大量投入はやめなければならない。
- エ 我々は人間と自然の持続可能な関係を維持し続けるために里の労働に戻るべきだ。
- オ 人間と自然を商品とする考え方をやめて新しい物質循環の形を目指す必要がある。

〔二〕 潤間^{うるま}さやかは不登校ののち夜間中学に通うことにした。夜間中学は、何らかの事情で義務教育の機会を得られなかった人が通う学校である。ある日さやかは、識字（日本語の文字の読み書き）クラスの前を通りかかった。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（なお字数制限のある問いは句読点や記号も一字に含みます）

「潤間さん」

背後から呼ばれて、肩^{かた}をぼん、と叩^{たた}かれた。驚^{おどろ}いて振り向くと、担任の江口^{えぐち}が立っていた。

「識字クラスの授業を見るのは、初めて？」

問われて、さやかは深く頷^{うなず}く。そして江口先生に、教室の窓際^{まじわ}に座る老女をそつと指し示した。

* 八十路^{やそじ}近い女性が、一心不乱にプリントの「あ」という文字をなぞっている。

「あのひと……あの生徒さんは、私の祖母と同年くらいやと思います。けど、字が読めへんて……書けへんて……」
あとは言葉にならず、言い淀^{よど}む。

戦争や貧困や病などで学校に行けなかった——そういう事情は見聞きして、充分^{じゅうぶん}に知っているつもりだった。けれど、まさか……。

声を失し、棒立ちになるさやかに、教諭^{きょうゆ}は、

「これが、現実なんよ」

と、平^{たい}らかに告げた。

教室では、生徒たちが各々^{おのおの}、プリントと格闘^{かくとう}している。その授業風景に目を向けたまま、江口先生は声を落として、こう続ける。

「文字を読めない、書けない——そのことが、あのひとたちに、どれほどの過酷^{かこく}な人生を強^しいたのか。考えてみてね」

あ・お・ぞ・ら

あ・お・ぞ・ら

再び、音読の声ろくが廊下ろうかまで流れてきた。

③ 「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。憲法二十六条では、このように」

社会科の教科書を、担当教師の田宮たみやがゆつくりと読み上げている。

二年三組の生徒たちは、教科書を目で追い、時々小さな声で唱和しつつ、「教育を受ける権利」について学んでいく。

あ・お・ぞ・ら

耳の奥おくには、先刻の識字クラスの生徒たちの声こゝろがこびりついて、消えることがない。さやかは教科書から視線を外し、そつと周囲を見回した。

* 中国残留孤児ちゆうごくざんりゅうこだった* 露子ろこ、在日の* 正子ちよんじやハルモニ、ほかにも* 戦禍せんかや貧しさのため、学齡期がくれいに学校に行けなかったひとたち。

今、当たり前のように机を並べているけれど、皆みな、識字から……あそこからスタートしたのだろうか。

国語、英語、数学、社会、理科。

中学で学ぶ五教科全てを、識字から始めて身に付けようとするとするなら、どれほどの根気と努力いきが要いることか。

それでも学びたい、と思うのは何故なぜだろう。その熱意ねつぎは何処どこから生まれるのか。考えても、考えても、さやかにはわからなかった。

「先生、今日もありがとうございます」

「はい、お疲れさま。気を付けて帰ってくださいね」

午後九時過ぎ、無事に授業を終え、夜間中学の生徒たちは、疲れながらも晴れやかな顔つきで校門を出ていく。

そのまま夜勤の仕事に向かう者も居れば、家路につく者も居る。さやかは、* 遠見とほみと正子ハルモニ、車椅子くるまいすの介助者かいじょしやとで駅

へと向かっていた。

「そうか、江口先生とそないな話をなあ」

吐息交じりに、遠見は呟く。

何処となく元氣のないさやかを氣遣い、遠見から何かあったか、と問われた。思い切って*スアンを迎えにいった先で見た光景、江口先生との遣り取りを打ち明けたさやかであった。

「わしも正子ハルモニも、識字から始めたよって、そらあ、大変やった。最初に教わったんが『つ』『く』『し』やったから、まだ何とかなった。けんど、あれが『あ』やったら、とうにくじけてるやろ」

なあ、正子ハルモニ、と同意を求めて、遠見は切なげに瞬きをした。

「中国残留孤児やった落子さんは、それでも十歳までは日本語の教育を受けてはったよって、進級も早かったけど、わしは……」

ゼロから始めてここまで来るのに六年かかった、と苦しげに遠見は話す。

「私は七年。七年かかったんよ」

柔らかに、正子ハルモニが口を開いた。

「それでも奇跡に近い、と思える。何せ、読むことも書くことも、どっちも全く敵わなかったんやからねえ」

正子ハルモニの言葉に、車椅子を押していた介助者が深く頷いていた。

飲食店、ドラッグストア、金融業、コンビニエンスストア、等々。駅周辺の繁華街には、電飾で縁取られた看板が林立し、文字が洪水のように押し寄せる。

「こんなに文字が氾濫してるのに……」

読めなかったら。

書けなかったら。

④ そんなん、想像も出来へん、という台詞を、さやかはぐっと呑み込んだ。

皆の歩みが自然に、遅くなる。

ポケットに、と遠見が自分の上着のポケットに手を入れてみせた。

「ポケットに、いつつも包帯を入れてたんや」

「包帯を？ 何で？」

さやかに問われて、遠見は気弱な笑みを浮かべる。

「仕事場でも役場でも何処でも、何かを『書け』と言われそうになると、手えに怪我した振りして、誰ぞに代わりに書いてもらうためやがな」

遠見がポケットから手を出した。その掌に、丸められた包帯が見えるようだった。

私は、と正子ハルモニが声を低める。

「私は眼鏡やった。よう眼鏡を忘れた振りをしたんよ。」

X
ためにねえ」

——これが、現実なんよ

江口先生の言葉が、その表情が脳裡のうりにありありと蘇よみがえる。

——文字を読めない、書けない。そのことが、あのひとたちに、どれほどの過酷な人生を強いたのか
 もしも、字が読めへんかったら……

書けへんかったら……

⑤ それが私やったら……

足もとが、大きくぐらりと崩れるような錯覚さうかくに襲おそわれて、さやかは両の足を踏ん張たばった。そうしなければ、立ってはいられなかった。

駅の改札前で遠見と別れ、車椅子の正子ハルモニと介助者と一緒いっしょに、プラットホームに向かう。さやかは押し黙だまったままだった。

何か用事を思い出したのだろう、介助者がホーム端はしの公衆電話を指して、

「ちよつと電話をかけてきます。少しでも待っててもらえますか」と断つてから、車椅子を離れた。

ラッシュアワーを過ぎたホームは静かで、次の電車を待つひとも、まばらだった。さやかは車椅子のハンドルに手を添えて、正子の隣りに立っていた。

駅名標、路線図、駅構内図、「終日禁煙」を始めとする標識、行先案内、等々。駅のホームには、大切な情報を記した表示が一杯あった。

もしも、一文字も読めないとしたら……。

蒸し暑い夜のはずが、背筋がぞくぞくと寒く、さやかは身震いをした。

さやかちゃん、と正子ハルモニは傍らのさやかを見上げる。

「朝鮮から無理やり日本に連れて来られた時、私は十二歳やったんよ」

母国語のハンゲルの読み書きさえ、充分に出来なかった。

* 女工から始めて、働きに働いてねえ、と正子ハルモニは自身の手に視線を落とす。変形した指の関節、節が高く、長年の苦勞が刻まれた手だった。

さやかは相手の目の高さよりも低くなるよう、車椅子の傍らに腰を落とした。

正子ハルモニは、淡々と続ける。

「読み書きを覚えたくても、『お前に字いなんぞ要らん。働け』と。皆、そない言うてねえ。一遍も学校へ行かせてもらわれへんかった」

戦争が終わって、縁あつて結婚し、家族にも恵まれた。

「字い知らんでも、生きてはいける。けどねえ、子どもの通信簿もよう読んでやれんかったんよ。娘の不思議そうな、悲しそうな顔は、何十年経ったかて、忘れられへん」

当時は思ひ出すのか、老女の声が湿りけを帯びていた。

「文字を知らんから、何遍も騙されて。家も財産も全部、持っていかれたこともあったわ」
 今なら相談する窓口もあるだろうが、当時は泣き寝入りするほかなかったのだという。

「そんな……ひどい……」

かける言葉も見つからず、さやかは声を失するよりなかった。

友の受けた理不尽を我が身に置き換え、俯くばかりのさやかに、正子ハルモニはそつと手を差し伸べる。

「せやけどねえ、さやかちゃん」

友の皺だらけの手が、さやかの手をそつと掴んだ。

「夜間中学で手に入れた文字は、もう誰も私から奪うことはでけへんの」

正子ハルモニの一言に、さやかは不意を突かれる。

ホームに、電車が到着する合図の音楽が流れて来た。

「お待たせして済みません」

詫びながら、介助者が車椅子に駆け寄る。

⑥「ほな、さやかちゃん、お休み。また明日、学校でね」

掌にぐつと力を込めてから、正子ハルモニは、さやかの手を放した。

介助者と車椅子の同級生が乗車した電車が、ホームを滑り出る。遠ざかって闇に紛れたあとも、さやかはホームに佇んで

いた。

友の温もりが、握る手に込められた力が、まださやかの掌に残る。

学校はおろか、文字さえも与えられなかった正子ハルモニ。

何もかも与えられながら、それを当然としか思わなかった自分。

——夜間中学で手に入れた文字は、もう誰も私から奪うことはでけへんの

あ・お・ぞ・ら

正子ハルモニの言葉に、識字クラスの授業風景が重なる。

ああ、とさやかは思う。

ああ、そうか、と。

『学び』とは、誰にも奪われないものを自分の中に蓄える、ということなのか。

誰のためでもない、自分のために。

自分の人生のために。

「強いなあ、強いわ、ほんまに」

思わず、声に出していた。

それに比べて、自分は何と「あかんたれ」なんやろか。

血を吐く思いで自身の中に蓄えたものなど、何一つないように思う。全て、当然のものとして受け取ってきた。

強くありたい。強くなりた。

⑦ 正子ハルモニの感触が宿る掌を、さやかはぐつと拳に握りしめていた。

(高田郁『星の教室』による)

(注)

* 八十路……八十歳のこと。

* 中国残留孤児……第二次世界大戦後、家族と離れ離れになり、中国に残された日本人の子どもたちのこと。

* 路子……夜間中学の生徒。さやかを夜間中学へとつないでくれた恩人。

* 正子ハルモニ……夜間中学の生徒でもうすぐ八十歳になり、車椅子を利用している。植民地政策により朝鮮から日本に連れて来られた。「ハルモニ」とは「おばあさん」という意味。

* 戦禍……戦争による被害。

* 遠見……夜間中学の生徒。初老の男性。

* スアン……夜間中学の生徒。

* 女工……工場で働く女性の労働者。

問1 傍線部①「深く頷く」とありますが、この時のさやか的心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 江口先生に突然話しかけられて動揺したことを、なんとか隠そうとしている。
- イ 識字クラスの現実を見て、自分の認識が甘かったことを重く受け止めている。
- ウ 識字クラスの教室内の生徒に、自分の存在を気付かれないと思っている。
- エ 今まで自分が識字クラスを知らなかったことを、心から恥ずかしく感じている。
- オ 見慣れない光景を目にして不安を感じていたが、江口先生が来てほっとしている。

問2 傍線部②「平らかに告げた」とありますが、この時の江口先生的心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア さやかの悲しみに共感は示しつつも、臨機応変な対応が苦手なさやかを残念に思う気持ち。
- イ さやかの反応に怒りを感じつつも、状況を説明するために冷静にふるまおうとする気持ち。
- ウ さやかの行動を疑問に思いつつも、彼らの過酷な人生に理解を示してほしいと思う気持ち。
- エ さやかの動揺をおだやかに受け止めつつも、現実の厳しさに向き合わせようとする気持ち。
- オ さやかの驚きを頭では把握しつつも、識字について無知なのは理解しがたいと思う気持ち。

問3 傍線部③「『すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。憲法二十六条では、このように』社会科の教科書を、担当教師の田宮がゆつくりと読み上げている」とあるが、これにはどのようなことを印象付ける効果があるか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 識字クラスの生徒には、社会科であつかう内容の習得が非常に重要であるということ。
- イ 識字クラスの生徒は、通常の速さで進行する授業についていくのが難しいということ。
- ウ 識字クラスの生徒は、憲法で定められている教育を受ける権利を奪われていたこと。
- エ 識字クラスの生徒には、識字にとどまらず法律に関する高度な内容をも学ぶ意欲があること。
- オ 識字クラスの生徒は、本来は教育を受けるのに十分な能力を持った人たちであること。

問4 二重傍線部A「林立」、B「ありありと」の意味として適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

A「林立」

- ア 数多く並び立つこと
- イ 鮮やかに並び立つこと
- ウ 乱雑に並び立つこと
- エ まばらに並び立つこと
- オ 音もなく並び立つこと

B「ありありと」

- ア ゆつくりと
- イ はっきりと
- ウ 重々しく
- エ 突然に
- オ おほろげに

問5 傍線部④「そんなん、想像も出来へん、という台詞を、さやかはぐつと呑み込んだ」のはなぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 遠見や正子ハルモニが文字の氾濫する社会でどれだけ真剣しんけんに学びに向き合ったかに思いおよび、最低限の敬意を示さなければならぬと思われたから。

イ 遠見や正子ハルモニは文字が氾濫する社会で苦勞した過去を受け入れているのに、自分だけがその苦勞に動揺を見せることが場違いばちがであると感じたから。

ウ 遠見や正子ハルモニは文字が氾濫する社会を生き抜いてきたという経験があるが、そうでない自分が安易に共感することは慎むべきだと思われたから。

エ 遠見や正子ハルモニが文字の氾濫する社会で困難を抱えてきたことを知り、読み書きできる自分がそれを他人事のようにとらえるのは失礼だと感じたから。

オ 遠見や正子ハルモニが文字の氾濫する社会に不満を募らせてきたことを想像し、当事者でない自分が発言するのは反感を買うかもしれないと思われたから。

問6 空欄Xにあてはまる言葉を十字以内で考えて書きなさい。

問7 傍線部⑤「足もとが、大きくぐらりと崩れるような錯覚に襲われて」とありますが、なぜこのような感覚に襲われたのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 当然のように何不自由なく暮らす今の幸せは、この先どうなるかわからないと思ったから。

イ 厳しい現実を自分だけが分かっていない状況は、どうにも耐えられないものだと感じたから。

ウ これまでの自分の努力は、正子ハルモニたちに比べて取るに足らないものだと思っただから。

エ 他人の気持ちにどうしても共感できない自分には、想像力が足りないと思いつたから。

オ 読み書きができるというきわめて当たり前のことが、実は当たり前ではないと気付いたから。

問8 傍線部⑥「掌にぐつと力を込めてから」とありますが、正子ハルモニがそのようにした理由の説明として最も適当なものの中から選び、記号で答えなさい。

ア 夜間中学での学びにやりがいを見出しつつ、自分たちが受けてきた苦労をさやかに知ってもらおうと思っただから。

イ 世の中の理不尽さに言葉を失うさやかを慰めつつ、少しづつでも乗り越えられると伝えてはげまそうとしたから。

ウ これまで泣き寝入りしてきた自分の経験を伝えつつ、さやかには同じような経験をしてほしくないと思っただから。

エ ずつと話を聞いてくれたさやかに感謝しつつ、これからどうするかは自分で考えることだと悟らせようとしたから。

オ 読み書きができないために受けた苦労を思い出しつつ、さやかたちの世代でよい社会にしてほしいと思っただから。

問9 傍線部⑦「正子ハルモニの感触が宿る掌を、さやかはぐつと拳に握りしめていた」とありますが、この時のさやかの気持ちを持ちを六十字以内で説明しなさい。

問10 本文から読み取れるさやか性格として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 戦争や貧困の苦しみを乗り越えてきた同級生の過去と、不自由なく生活している今の自分の暮らしを比較し、その違いについて一つ一つ検証できる真面目さがある。

イ 読み書きができないことで差別を受けてきた同級生の過去を知り、字の読み書きができたとしても、自分だけは他者を傷つけない人間になろうと考える心の強さがある。

ウ 簡単なひらがなすら読み書きができなかったという同級生の過去に衝撃を受けながらも、その悲しみや苦しみを理解しようと、他者に寄り添える誠実さがある。

エ 読み書きができなかった同級生の苦労を想像し、その場にいられないほどの恐怖を感じたが、その恐怖を他者に悟られないようふるまうことができる冷静さがある。

オ 読み書きができなかったことを他者に対してごまかしていた同級生の行為について、心から同情しつつ、何も悪いこととはしていないと慰めようとする優しさがある。

㊦ 次の傍線部のカタカナを漢字に書き改めなさい。

- ① 今までの作品がイツキヨに放送される。
- ② 入学式でシユクジを述べる。
- ③ 入金デンプィヨウを確認する。
- ④ メバエの季節になる。
- ⑤ 図書館でかりた本を返却する。へんきやく
- ⑥ 雑草を取りノゾク。
- ⑦ 地中海のエンガンを旅行する。
- ⑧ チームのダイコクバシラとして活躍する。かつやく
- ⑨ ボウエンキヨウで星を見る。
- ⑩ 留守番電話にロクオンする。



2026A1

↓ここにシールを貼ってください↓

国語 解答用紙

受験番号						
名前						

問10

問9

問8

問7

問6

i

ii

iii

iv

v

問3

問4

問5

問2

A

B

C

問1

①

②

から。

三

問10

問9

問7

問8

問6

問4

A

B

問5

問1

問2

問3

⑨

⑦

④

①

⑧

⑤

②

⑩

⑥

③